



# 今昔スイッチ



川路 新吉

# 今昔スイッチ

「なんすかそれ」

私が今昔スイッチを持っていると、部下のタナカがめざとくそれを見つけた。

「聞いて驚くな。過去を変える装置だ」

胸を張って今昔スイッチを見せたが、質問してきたくせにタナカはあまり興味を示さなかった

。

腹立たしい部下は無視することにして、私は準備を始めた。

とうとう過去に戻る装置を発明することができた。

これで過去に戻ってやり直すのだ。戻るのはもちろん三十年前。

当時、私にはライバルがいた。

ヤツと私は大学の同期。同じ教授に師事し、卒業後もお互い研究者となり、しのぎを削った間柄だ。

私がある賞を受賞すれば、次はヤツがまた別の賞を受賞する。その繰り返し。

ヤツと私の実力に差はなかった。

あったのはほんの少しの運の差。

三十年前、ヤツが研究者にとってもっとも権威ある賞、マーブル賞を受賞してから私の人生が狂い始めた。

私はもちろん同期の栄誉をたたえた。しかし、悔しさがなかったと言えは嘘になる。

悔しさをバネにさらに研究に没頭した。

しかし、没頭すれば没頭するほど、私のまわりから友人たちは去っていき、業績もあげられなくなった。そして研究費もなかなかおりにこなくなっていく。

それもこれもマーブル賞を受賞できなかったからだ。

マーブル賞を受賞してさえいれば、こんなところで部下にバカにされているような人間ではないのだ。

「おい」

呼ぶ声にタナカはわずらわしそうに顔を上げる。

「このスイッチを押すと、私は過去に行く」

「はあ」

「ただ、この装置には若干問題がある」

「どんな問題ですか」

そう言うタナカは、裏腹にあまり興味がなさそうだった。

「私がこのまま過去に行くことはできない。行くことができるのは私の精神だけ。過去の自分と今の自分の精神を入れ替えることで過去に行くことができるのだ」

「で、ぼくにどうしろと」

「私の精神が過去に出発すると同時に、過去の私の精神がこの私に移ることになる」

「はあ」

「一年ほど過去に行くつもりだから、その間、昔の私の相手をしてやってくれ」

ええ！めんどくさい、というタナカの声が聞こえたが、私はかまわずスイッチを押していた。  
私は過去に行った。ヤツがマーブル賞を受賞するちょうど一年前だ。

私は懐かしさにとらわれそうになった。研究者として一番楽しかった時期。寝食を忘れて研究した日々。

しかし、それに浸っている暇はなかった。

それから一年、わたしはマーブル賞を受賞するために研究に没頭した。過去の未熟な私ではなく、研究者として円熟した私の頭脳を使って研究を行うのだ。

結果、大成功だった。

私はマーブル賞を受賞した。

時の人として様々な称賛を受けた。

これで変わる。私は、もう用はない過去から現在に戻った。

「あれ、ひょっとして帰って来ちゃいました？」

過去から戻ってきた私に浴びせられたのはタナカの不躰な言葉だった。

「帰って来ちゃったとは何だ」

タナカの顔にはなぜか残念そうな表情が浮かんでいる。成功者の帰還を喜んでいる顔ではない。

「どうでした？うまくいきました？」

「ああ、大成功だ」

過去が切り替わったのだ、そんなことわかっているだろうに。

「君には迷惑かけてしまったな。ろくなものじゃなかったろう。過去の私は」

「いやあ、実に気持ちのいい人間でしたよ」

タナカ言葉は予想外の言葉だった。

なんだと？マーブル賞もとれなかったような未熟な人間のどこがよかったというのだ。

「そんなこと言たって何もできなかつたろう」

「確かに研究者としてのレベルは、今のぼくよりちょっと上ってところですかね。でもおごらず謙虚でありながら、あふれる熱意を持っている。十分に見習うところがありましたよ」

それから、タナカは過去の私をほめたたえ続けた。

終いには

「あの人の下で働けたのは幸せだったなあ」

などと言う。

何を言っているのだ。目の前にマーブル賞受賞者がいるというのに。

「何を冗談を言っているんだ。マーブル賞もとれないような人間の何が立派なんだ。私のほうが立派に決まっているだろう。君は幸せものだな」

私は上機嫌でそう言った。

だが、それからタナカは何も言わなくなってしまった。  
ただ冷ややかな視線を私に向けるだけだった。

## 今昔スイッチ

<http://p.booklog.jp/book/41461>

著者：川路 新吉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bowmoq/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41461>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41461>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.